

アメリカ文学史

佐伯彰一



筑摩叢書 264

筑摩叢書 264

アメリカ文学史

佐伯彰一



筑摩書房

佐伯彰一（さえき しょういち）

1922年，富山県に生まれる

1943年，東大文学部英文科卒業。現在，中央大学教授

文芸評論家

主要著訳書——『現代小説の問題点』『文学的アメリカ』『日本を
考える』『伝記と分析の間』，ミュー『小説の構造』，フォークナ
ー『死の床によこたわって』，ペロー『雨の王ヘンダーソン』

アメリカ文学史——エゴのゆくえ—— 筑摩叢書 264

1980年2月25日 初版第1刷発行

1990年1月30日 初版第4刷発行

著 者 佐 伯 彰 一

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都台東区蔵前2-6-4

郵便番号 111

電話 東京 5687-2680番（営業）

東京 5687-2670番（編集）

© 1980 Printed in Japan

振替 東京 6-4123番

ISBN4-480-01264-8 C1098

三晃印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小売読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

叢書版によせて

この本の初版が出たのが一九六九年だから、もう十年以上前、こんど新装版で再度お目見えすることになって、まことにうれしい。「文学史」といった種類の本は、とにかく持ちの良さが肝心で、十年そこそこでは、まだとても威張れた話ではないが、まずは第一関門の通過という気がしている。

アメリカ文学その後の動きについて、加筆の余裕があたえられなかったのは残念だが、じつの所、七〇年代以降、いわばベトナム戦争以後のアメリカ文学は一種の沈静期、内省期にふみこんでいるようで、さほど目ざましい新しい動きは認められない。たとえば、六〇年代にかくべつ花々しい活躍ぶりを示したノーマン・メーラー、ジェイムズ・ボールドウィンなどがその後低迷がちなものに対して、ソール・ペローとかマラマッドなど、もともと地道な内向派の方が、ゆるぎない歩み、業績を示しているのが、その間の事情を端的、象徴的に物語っている。トーマス・ピンチオン、カート・ヴォネガット、ジョン・バース、ジョン・ガードナーなど注目するに足る新作家の登場がなかった訳ではないが、七〇年代そのものと総括するには、今しばらく

著者まえがき

『アメリカ文学史』というのは、ぼくとして兼ねてから一番書きたい本の一つで、そこでまた一番書くのが、わい本の一つでもあった。文字通りの眼高手低、意図と野心ばかりがいたずらに大きく高くふくらむばかりで、肝心の読書の幅と深さ、知識の量と、まるで不釣り合いと認めざるを得ない。試してみたい視点、追求したい主題は、次々と湧きあがり勝手にふくらんでゆくのに、これに文学的な肉づけをあたえ、歴史的な一貫性をもたせる用意と能力とが身にそなわっていない。かりに始めから『アメリカ文学史』を書き下ろそうと企てたのであったら、バルザックの『知られざる傑作』ではないけれど、下絵ばかりを書いては消し、書いては消しで、全体の輪廓さえ茫漠として定かならぬ混沌状態からついに抜け出すことさえ難しかったに違いない。

ところが、こんどの場合、幸か不幸か、一応の下絵なるものが、数年前に書き上げられてあった。筑摩書房の『世界文学大系』の月報に、連載の形で「アメリカ文学史」を求められて、とにかく月ごとに、きびしい枚数の制限と締切期日に追われながら、何とかぼくなりの答案を十数回分デッチ上げていた。そこでこの下絵をもとに、ご自由に書き直し、書き足して、一冊の本にするつもりはないかという、有難い申し出に二つ返事で飛びつき

ながら、実際の訂正、加筆の方は一向にはかどらなかつた。この申し出を受けたのが、もう数年前の話だから、われながらあきれるほどの疎懶ぶりという他ないのだが、下絵にしろ一応それなりに出来上ったものに手を加え、やり直すというのは、意外に厄介で、しんどい仕事であつた。月ごとの連載には、それなりのいわば出たとこ勝負の面白さもあるので、あちこちの奇妙なふくらみやへこみが案外な生気を帯びている。なまじそれに後から手を加えると、いかにも型通りのアカデミックな「美人画」になりかねない。それに何より、いざとなると冒頭でふれた一冊の『アメリカ文学史』を書くといふことのごわさが、悪夢的な幻影のように大きく前に立ちはだかつて、いよいよ加筆の意欲もしほみがちであつた。しかし、去年の夏、カナダから帰国して以来、やっと重い腰を上げて、長らく放置した古いカンバスに立ち向うことになった。下絵の絵具がすでに乾きすぎていて両方の色調がチグハグになったり、加筆によってかえって全体のプロポーションが狂つてきたりしたふしもあるけれど、ともかくあちらに一筆、こちらに二筆と曲りなりにもまとめ上げたのが、ご覧の通りの本書である。

じつは、本書の下絵を書き出した時、ひそかにぼくの心にあつたお手本は、リットン・ストレーチの“Landmarks in French Literature”(一九二二)であつた。中世の「武勲詩」やヴィヨンの両「遺言書」から、サント・ブーヴやフローベルまでに至る多彩豊富な

フランス文学史をなんと文庫版の百八十頁のうちに、ものみごとに封じこめて見せた。

しかも、乾からびた教科書の圧縮の正反対の、きびきびした生氣にあふれ、ほんの一筆描きのスケッチによって対象の特質を心憎くもとらえおおせている。あまりに鮮かすぎ、みごとすぎて、鶉のまねをする鳥ともゆくまいことは承知の上で、何とか根本の心構え、組み立て方の上だけでも、ストレーチ張りでゆきたいと願った。というのは、現在のように、個別的、専門的な研究がすすんだ段階で、個人の手による『アメリカ文学史』というのが、そもそもドン・キホーテ的な企てであり、詳しい歴史的、伝記的な事実の網羅、提供など始めから話にもならない。個人としてやれるのは、むしろ彼なりの総体観、一つの見通しの提供であり、つまりは文学史論をこそ目ざすべきであろう。その上、アメリカ文学は、ぼくらにとって、太平洋を隔てた国の文学であり、精密な対象密着は困難なかわりに、遙かに遠望して、一つの全体像をまとめ上げるといふ地の利には、むしろ恵まれていゝのだ。少なくとも、本国の新研究のあとを追っかけ廻すよりは、異質的な他国人として外側から大きくつかむという点を強味として生かすように努めるべきであろう。

そこで、本書で取り上げる作家も作品の数も、始めから万遍のない網羅などを目ざさずに、ぼくなりの見方と読書体験に即して限定して、総体としてのアメリカ文学像を浮ばせることに力を注いだ。「エゴのゆくえ」という副題をつけて見たのだが、アメリカ的なエ

ゴの軌跡を文学史のうちにたどって見るという点に、ぼくかなりの基軸をすえたのである。

また、戦争中の大学生としてアメリカ文学を読みはじめたぼくにとっては、アメリカ文学は、たんに任意の外国文学の一つではなく、かつて敵として戦った隣国の文学である。明治の開国以来、ほとんど運命的ともよびたい、入りくんだ絆^{きずな}でからみ合わされてきた隣国人の生み出した文学であり、この運命的な隣人の本質を見きわめ、わが手でたしかめたいという衝動を、ぼくのアメリカ文学を読む作業から排除することは不可能だ。その点、ぼくのアメリカ文学論は、ぼくかなりのアメリカ論、アメリカ人論に直通せざるを得ない。間、個別的な作品論から勝手すぎ強引すぎる一般論に一気に飛躍する傾きは、自戒しながらもどうにも避け難かった。今となつては、このぼくかなりの歪みが、何らかの積極的な特徴として受けとってもらえればと、虫のいい願いにする他はあるまい。二年前の春、ぼくは『文学的アメリカ』（中央公論社刊）という小著を書いたが、その意図においても、態度においても、本書と双生児のように結びついている。本書と併せ読んで下されば、有難いというもう一つの願いを、虫のいいついでに、書きそえさせて頂こう。

このささやかな書物も、担当の筑摩書房編集部・田中昌太郎君に、数え切れないお手数と厄介をおかけしたほか、年表の作製については、ぼくのかつての学生、また信頼する若い友人の大井浩二君に助けて頂いた。あつくお礼申し上げたい。

目 次

アメリカ文学の特質

9

情熱と実行——十七、八世紀の文学

15

国民文学の確立——十九世紀の文学

原型と夢

32

開花と結実

46

西部の文学的登場

59

アメリカ的な「自然」

80

世界文学への道——二十世紀の文学

「無邪気」な転換期

98

中西部の抬頭

反撥と定着

ひとつの試練期

幻滅を越えて

有機的な場を求めて

補足的に

アメリカ文学研究の問題

アメリカ的エゴのゆくえ

年表

索引

278 266 229 217

177 163 145 125 111

アメリカ文学史

アメリカ文学の特質

アメリカ文学史にとりかかるまえに、ごく手短かな一般論を許していただきたい。長話ではないのだし、せいぜい旅立つ直前の、二、三の実際的な注意といった程度のものにすぎぬのだから。アメリカ文学について、当然のことながら、まず忘れてならないのは、その歴史の若さである。白人開拓のそもその当初からかぞえても三世紀半にすぎず、文学らしい文学、いや職業的な作家が物を書きだしてから二百年に満たない。ある批評家がいみじくも要約したように、「世界の重要な文学のうち、印刷術よりも若いものは、アメリカ文学以外にはない」のである。自国の長い文学伝統に、馴れすぎたぼくらは、とくにこの点をはつきりと念頭におく必要がある。ぼくらの自明としている「常識」の多くが、ここでは通用しないのである。

たとえば、その著しいひとつに、アメリカ文学は「散文から始まった」ということがある。これは世界文学史からみれば、大へん特異な点であって、まずたいがいの国の文学は、叙事詩や民衆的な歌謡といった、口誦的な詩のジャンルから出発している。それに対して、アメリカ文学は、まず初期渡航者がヨーロッパ本国へ書き送った報告や旅行記といった、実用的な散文からはじまった。いわばノン・フィクションの散文にアメリカ文学の根があるわけで、こういう文学は、まず他に見

当然ない。これをたんに、現実的とかリアリズムへの指向などといえば単純化しすぎるが、何よりもまず事実を——何はさておき事実の提出、また列举から始めようという態度は、意外に長くアメリカ文学のうちに尾をひいているものではなからうか。たとえば、あの一貫した人工庭園の幻想家、アメリカ的な現実などには終始一貫背をむけ通したエドガー・アラン・ポーの小説の細部が、じつはデフォーはだしに事実的、「科学的」だったり、また野方図な唱い手、壮大な独語家たる『草の葉』のホイットマンのうちに、じつは逞しい事実蒐集家、列举家の魂が生きている。また、裸の事実に対する執念をぬきにして、ヘミングウェイのあの独特な文体は考えられないだろう。

もっと一般的に考えても、この点はずっと後まで尾を引いてくる点なので、ごく最近まで、アメリカがいかなる場所であり、アメリカ人がいったいいかなる国民であるかを、ヨーロッパに対して、説明し、報告しようという気持が、多くのアメリカ作家の心に暗黙のうちにはたらいっていたようにみえる。「アメリカ人とは何か」という問が、アメリカ文学史をつらぬく中心的な主題ともなっているのだ。こうした自意識の強さは「後進国」に共通するものには違いないが、アメリカ人の大半がもともとヨーロッパ人であったという事実のために、独特の微妙な陰影が生ずる。一方では引け目ともなり、また新しい独自性のことさらな強調ともなった。本家に対する出店の、本国に対する植民地人の引け目といえは平凡な話になるが、とくに独立以後反抗意識が高まり、国際的な地位についての自信が強まるにつれて、アメリカのヨーロッパとは異なる独自性を言い立てたい気持がつ

のつてくると、話は入りくんだことになる。もともと同じヨーロッパ人なのだから、似通っているだけに、かえって、違いを強く押し立てようということになり、いわばアメリカ的なものことさらな定義と強調が、目立ち始めるのだ。しかもこれは一時期の特異な現象という以上に、現在にいたるまでアメリカの思想家、作家のうちに一貫して息づき、彼らを駆り立ててきた根源衝動の如きものとなった。アメリカを捨ててイギリスに帰化したヘンリー・ジェイムズに小説『アメリカ人』があり、ドイツ系の移民の息子ドライサーに、小説『アメリカの悲劇』があり、現代のもっとも痛烈なアメリカ批判者、ユダヤ系作家のノーマン・メイラーに、『アメリカの夢』があるといった具合だ。さらには、話を一般化して考えれば、「若さ」と欠如から生ずる偏向が、かえって積極的なバネとして働くという事情が見出される。一応のマイナスが、逆にかえってプラスに転化するということが起こり得るのだ。たとえば、国民的な叙事詩の欠如が、逆に叙事詩的な文学へのあこがれを強めたという事情など、この目ざましい一例としてあげていい。ホイットマンの『草の葉』、メルヴィルの『白鯨』をはじめ、現代のドス・パソスの『U・S・A』、スタインベックの『怒りの葡萄』、メーラーの『裸者と死者』にいたるまで、壮大な規模で集団の動きをとらえようという系列の作品が、アメリカ文学の場合ほど目立つ例は、ほかに見あたらない。最近のアメリカの文学批評で、自国の文学伝統の問題がつかよい関心を集め、時には「アメリカ的なもの」の一面的な強調におちいりかねないというのも、欠如が逆に意識的な探求をかきたてる例だ、といってよいだろう。

アメリカの共通語は、いうまでもなく英語であり、すべての点でアングロ・サクソン系が中心となってきたには違いないが、とくに十九世紀後半以来、この常識ではわりきりかねるほど、アングロ・サクソン系以外の比重が増してきている。じじつ度重なる移民の大波は、アメリカをちょっとほかに類のない人種のもつぽと化したのであって、この点は現代の代表的な作家の名前を思い浮かべてみただけでもすぐ判る。ドライサーやスタインベックのドイツ系、オニールのアイルランド系、ドス・パソスのポルトガル系、ナボコフのロシア系、サローヤンのアルメニア系、ペローやマラマッドのユダヤ系、ライトやエリソンの黒人作家と、このリストはまだいくらかでも引きのばすことができる。もちろん人種と文学との関係は、複雑微妙であつて、粗雑な分類や安易な決定論はなにひとつもたたらさないが、こうした人種構成の雑多さが、アメリカの国家と、ひいては文学のうえに、なんらかの強い刻印を与えずにはおかぬことだけは疑えないであらう。

一面では、アメリカ文学くらい、多様な要素と特色に富み、簡単に概括することのむずかしい文学もないのであるが、他面、そうした多様さの底をつらぬいて、これほど一様に、いわゆるアメリカ的な特色を示している文学も少ない、という気がする。雑多な諸人種をひとつの国民へと形成し、まとめあげるための「アメリカ化」の努力が強く意識的になされてきたためであらうが、伝統の乏しい国では、風土、環境の影響力が思ひのほか大きな役割を果たすのだ。アメリカ文学をよんでいて、だれかれという作家の個人的な特徴よりもアメリカ的な風土そのものにじかに触れる思いを味わわ

されることも多い。こうした自然による、また人為的な「アメリカ化」と、人種の雑多さとのからみあい、文学といわずひろくアメリカ文化をなめる際にも、見のがしてはならない点である。

アメリカは大陸の半ばを占めている。ひとくちにアメリカといっても、たとえば古くからひらけた大西洋岸の東部諸州と西部の広漠たる曠原地帯と、またカナダ国境の諸州と南部地方とでは、氣候も風土もまるで別の国のように異なっている。ふつうには、東部、中西部、西部、南部の四つの地域にわけているが、そのいずれの地域の出身であるかは、ある作家を考える場合に忘れてはならない点であり、また文学史についても、ある時期の文学史的な重心がどの地域に存したかは、絶対に欠かせぬ項目に属する。たんにいわゆるローカル・カラーの文学が目立つというだけの話ではないのだ。たとえば、ヘンリー・ジェイムズとマーク・トウェインは、まったくの同世代人であるが、『婦人の肖像』と『ハックルベリー・フィンの冒険』との余りにいちじるしい相違、対照を、たんにこの二人の個性や生き方のそれに還元することはどうにも不可能だろう。また、ヘミングウェイとフォークナーという、別の時代の同世代作家をとり上げてみても、中西部と南部という地域の問題をぬきにしては始まらない。いくら誇張していえば、アメリカ文学においては、「まず地域ありき」——作家たちの文学的資質をいう以前に、地域という決定的な重みが先在する、とさえいいたいほどだ。個々の作家についてばかりでなく、文学史についてもこれは当てはまるので、まず東部を中心とする、いわゆる「ニュー・イングランド文学」が、十九世紀前半にはなやかな開花を見